

蓬萊町だより

第四十四号
 平成8年3月20日
 発行 蓬萊町会
 者 者 文 部
 編 集 化 部

蓬萊町界限 (その三十八)

江戸の華と火消し (四)

林 順 信

◆格式の高かった旗本の火消し

臥煙 (がえん) の話

前回のべた定火消 (じょうびけし) は旗本四千石どりの以上者共から十名を選んで、それぞれ江戸の十か所に消防屯所を作り、火の見櫓をこしらえた。現代の消防署の望楼と同じだが、高さは三丈 (約九メートル余) で周囲は素朴に生葺を塗ったものだった。

八代將軍吉宗の頃には、江戸市中の十町に一つずつの火の見櫓をつくらせたが、高さは定火消のものより低く、すべて黒塗りであった。定火消の櫓の上には、真中に太鼓、四隅には半鐘だけだった。

定火消の櫓には常に二人の見張番が番をしていて火事をいち早く発見するように努めた。いざ火事となると、定火消の打ち鳴らす太鼓の音

定火消と臥煙 (がえん)
 『風俗画報』江戸の花より



は遠く四、五町にまで達したという。というのも太鼓の中には鉄の鎖がぶらさげてあったので、反響が反響を呼んで遠くにまで鳴りわたったという。

この定火消の太鼓が鳴らない限り、他の櫓で火事を第一番に発見したとしても、半鐘を鳴らすことは出来なかった。封建的の典型を地で行く非効率なしきたりだった。

また、定火消の櫓には二本の紐が下がっていて、いざ火事となると、あとの一人が二本の紐を同時に引っばった。一本の紐は主人の枕もとの鈴を鳴らし、もう一本の方には鳴子がついていて、人足部屋にカランカランと大きな音を立てる仕掛になっていた。

●一本の丸太に十人が寝る

この定火消一隊百三十余人のうちの百人が人足で、これを臥煙（がえん）と呼んでいた。まさに火事場で臥しながら消火に当った働き手であった。臥煙といえども、町人ではなく、れっきとした旗本の二男坊や三男坊、天下泰平にさしたる仕事もなく、世をすねての暴れん坊たちであった。肌には「くりからもんもん」の彫物をして、毎日三度も風呂に入り、髪の手入れも毎日して、足には真白い足袋を日々とりかえてはき、江戸の街を肩で風切って歩いた。平生金ばなれがよく、気風がいいので、町人たちが

らは人気者にされていた。

夏は火事が少ないが、火消屋敷に寝泊りしているという時にそなえた。

彼等は暇さえあれば、ばくちを打って遊んだ。余り強く取り締ると、火消屋敷から出て行ってしまふので、お上では大目に見ていた。

臥煙たちは、夜は一本の丸太を枕に十人くらいずつが寝ていた。火事となると不寝番が大槌一撃で丸太を打ちならすと、直ちに手甲、脚絆、火消し半天に向う鉢巻、櫛子、龍吐水、指俣、玄番桶、薫口などをかきつけて一もくさんに火事場に駆けつける。自慢の彫物を片肌ぬいでの勇肌、江戸の町民からやんやの喝采を浴びたという。いざという出番にそなえて、火消屋敷の門や玄関には、敷居がなく、足をとられずに直ぐに外に飛び出せた。（写真右上を参照）。

夏など夜の火事も少なく枕を高くして夢をむさばっていると、突然鳴子はカランカラン、大槌で一かつされて、いざ出陣となるや、実は不意打の演習だったなんていうこともあった。これを空出（からで）と称した。

享保の八代吉宗の頃には、一たん禁止されていた瓦葺き商家も許され、消防組織も少しは改善されて、やがて大岡越前守の時に、町方のいは四十八組の火消し制度が生まれる。

餅つき大会徒然

文化部副部長 倉田幸一

時のたつのは早いもので、二月如月も終り春は曙、弥生三月となりました。去る二月二十五日には恒例の町内餅つき大会を開催しいつもながらの楽しい光景が、繰り広げられました。昨年までは青年部主催でしたが、本年より町会主催となり、大勢の役員さん達が力一杯杵を振り下ろす勇姿を披露して下さるのではと期待を抱いておりましたが、不参加の方が多く大変残念でした。

結局、現青年部とそのOB（若手役員）と元氣いっばいの婦人部諸姉！！というあい変わらずの顔ぶれとなっていました。

ここで特筆すべきことは、一般会員の有志数名の方々が数年来お手伝いを引き受けてくださっていることです。このような方々との交流の輪が少しづつ広がって、行くことが、我々役員にとっても大変有意義なことだと考えています。

さてお話を少し変えて、当日の流れを追ってみましょう。午前九時集合、ただちに準備にとりかかる。これが実に早かった。毎年のことなので手順は熟知しているし役割はほぼ決まっているし、十時半頃には「さあやるぞ！」の気合いのこもっ

た掛け声と共に餅をつき始め、たちまち一番餅がつき上がってしまいました。それとほぼ同時につきたてのお餅を買ってお待ち帰りになる方や、その場で美味しそうにはおぼる子供さん達が大勢詰めかけ、瞬く間に三十三キロも用意したもち米が無くなってしまいました。お子さん達を対象に趣向を凝らし、つきたてのお餅でイチゴ大福を作ろうと用意もしていましたが、買ってお待ち帰りになろうとお待ちの方がひきもきらず、終始餅つきに追われるばかりで折角のイチゴ大福も企画倒れとなってしまいました。この様に年々皆さん方のお蔭で餅つき大会も盛んになって参りましたが、出来る事ならお待ち帰りになるだけでなく、その場で近所の方々と一緒に語りや情報交換等をなさりながら舌鼓を打ち、そして更に一歩進めて企画・準備等の段階からスタッフとして参加して頂けたら、もっと素晴らしい餅つき大会を味わえることではないでしょうか！ 一般会員の方たちが少しでも参加し体験して頂けるような企画をひとつでもふやし、このようなひとつひとつの積み重ねがより活発な町会活動へと繋がり、ひいてはより良い地域社会づくりへと広がっていくのだと確信します。来年もまた、皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

町会活動の概要

平成7年11月下旬から

平成8年3月中旬まで

総務部

12/9 「文京区を明るくする会」集会、区民センターに於て

「ごみ減量 ポスター」を各掲示板に掲示しました。

役員会を兼ねて「ご苦労会」開催、来賓に毎回「蓬莱たより」にご寄稿いただいで居られる「林 順信」先生をお招きして、よもやまの楽しいお話をうかがいました。参加者40名。

12/11 門松絵ビラを会員あてに配布。

12/22 役員の一部交代について、◎中部、清水康政氏から年齢により勇退させて欲しいとのお申し入れあり、同地区の、園田喜恵子様

2の18の15に後任を依頼、了承を得ました。

12/23 本日より29日まで延べ7日間、歳末夜警実施、無事平穩の内に終了しました。

1/5 文京区役所主催新年交歓会。
1/10 地下鉄「東大前駅」対策協以議会、向ヶ丘出張所にて開催、「駐輪場の設置」その他。

1/12 文京区町会連合会、新年交歓会が区民

センターに於て開催、会長、副会長、参加

1/25 向ヶ丘地区町会連合会、新年交歓会、「かねこ」にて、小林町会長出席。

2/4 総務部研修会、千石会館に於て開催。

2/10 第27回、「文京つつじ祭」総務部打ち合わせ会議、根津神社、社務所似て、参加者竹中、小川、猪熊。次のことが決まる。

1. 開催期間 4/12(金)から5/5まで延べ24日間。

2. 役務分担 概ね前年の事例に基づく。

3. 開苑式 4/12(金)午前10時 つつじ祭実行委員、集合9時 会費3千円

4. 賛助金 一口、一千元、二口以上をお願いしたい。締切り3/31

5. 来賓親しよく会、4/26(金) 午前11時 委員集合9時半

6. 境内警備 4/21(日)午前10時から午後4時まで

7. 甘酒茶屋 追分東部、追分、蓬莱、担当。当町会の当番は、5月5日。つつじ祭最終日。

防火防災部

1/12 本郷消防関係5団体、新年交歓会。坂本部長参加。

1/14 歳末夜警の慰労会、青年部を交えて開催。

防犯部

1/24 駒込防犯協会、新年交歓会、弥生会館にて、橋本部長出席。

交通部

1/18 駒込交通安全協会、新年交歓会、「花や」にて、三宅交通部長出席。

婦人部

12/8 「根津・向丘地区ごみ減量検討会」当町会から婦人部3名が参加。
12/12 「歳末助け合い募金」272件、計 195,300円。

文化部

12/9 「蓬萊たより」第43号配布。
1/15 「成人式」当町会でも年々若い方が少なくなっております。今年成人を迎えられる方は次の三名です。金子 忠嗣様
上田 耕士様、三野 喜奈子様
2/25 恒例の「町内餅つき大会」開催。

計 報

当町会員の方昨年11月末から本年2月上旬までにご逝去なされた方のお名前は左記の通りでございます。慎んで哀悼の意を表し、心よりご冥福をお祈りいたします。

青木 梅太郎 様 川口 弘 様。
記

蓬 萊 句 壇

強東風や納屋の羽目打つ「くるり棒」 小野 向 雪
晩学の受験のペンのふるえかな 金子 卿 雨
椿咲く人の生死を見つめ来て 々
東風吹くや心字が池の龜の水尾 福 山 七 重
挿木して日毎の晴雨記しをり 々
『子』は恵方わが産土の根津神社 森 ゆかり
参道に入れば風あり獅子ばやし 々

と、云えど手代りもなき女正月

池 田 連 木

初夢や届かぬ想いとどきけり

々

人の背をおがみて帰る初詣

々

編 集 後 記

春もようやく蘭熟してまいりましたが、あまりぱっとした話も期待できないこの頃です。国内国外を問わず一日も早く平和な明るい世の中に成ることを願わぬ人は居ないと思えますがそれには、他人頼みではなく一人一人が身近なところから手を染めて行くことが大事かとおもいます。町内活動も同じでご近所の人との日頃の気さくなお付き合いが何かの時に役立つと思えます。先日ある人の話を聞きましたが、ヨーロッパの某国では、成年に達した男子は、兵士なら二年、消防士なら三年、看護活動なら四年の役務を経なければ、一人前の社会人として認められず、就職にも影響すると云うことです。将来の日本を考えると、其に似た政策も考えなくてはいけないのかも知れません。

編集委員

小林音吉、竹中一馬、川西正造
猪熊良晃、倉田幸一、池田 暉